

職人のまち京都

西川郁美

(2019 年度入学 鈴木ゼミ 3 期生)

私が「職人の町京都」が好きな理由は、京都の山科に住んでおり職人のまちが身近にあった。実際に、通学路には扇子仏具団地があった。そこを通ると漆が匂い、扇子の白干しが行われていた。このような風景の中で過ごしてきた。学校の友人の親が扇子や、染物の職人であることも少なくなかった。祖父の職場が清水焼団地にあることもあり、秋の郷まつりには毎年のように行き、お茶碗などを購入していた。小学生の時は伝統産業である清水焼に触れる機会なども多くあり、幼いころから京都の伝統工芸品に触れていた。そのため、私は『職人のまち京都』が好きである。

京都市には、74 もの伝統産業がある。例えば、有名な西陣織や京友禅だけでなく、京たたみや花かんざしなど聞きなれないものもある。私は、職人のまちとして地元である山科にスポットを当て、話を進めていく。なぜ山科にスポットを当てるかというと、はじめに述べたように生まれ育った職人のまちが身近にあったからである。小学生の社会科の授業では、地元山科について詳しく学ぶカリキュラムがあった。その一環で地域の伝統産業について学ぶだけでなく、京都検定を高学年から毎年受験する習慣があった。問題には、伝統産業に関しても出題されていた。

数ある中で私は京扇子、京仏壇・京仏具、清水焼の 3 つにスポットを当てる。京仏壇・京仏具を一括りにしている理由は、それぞれで京都市の伝統産業として登録されているが、一括りにするのが説明しやすいためである。3 つを選んだ理由は、幼いころから身近にあったためである。

京仏壇・京仏具は、6 世紀に仏教が日本に伝来した際に仏教寺院が立てられ、仏具の生産が始まったとされている。平安時代になると、大きな寺院ができるなど、さらに仏教が広まることで仏具の生産も増えていった。その後は、金工・漆器などの高度の技術を持つ職人の手によって、より豪華なものが作られるようになった。このような中で、日本固有の仏具の形が確立するようになった。

次は京扇子について述べていく。伝統産業の多くは大陸から伝わったものがほとんどである。しかし、京扇子は 9 世紀ごろに日本で生まれた。貴族のあいだで用いられる中、発展を遂げてきた。涼しさと呼ぶための夏扇だけでなく、舞扇や能楽扇、板扇など多くの種類がある。昭和 49 年に山科区に仏具扇子団地造成された。木地の作成や箔押などを担う企業が立地している。団地には 12 の会社があり、仏具の製作を行っている。



京焼・清水焼は、自然の草花や風物を表した絵柄が特徴であり、多くの種類が作られている。茶道具をはじめ、家庭で使われる食器などにも京焼・清水焼が使われている。現在では、も多く若者でも使いやすい陶器のデザインも多くある。

清水焼団地には、清水焼の作家、窯元や陶土など関連企業も含め約 70 軒が集中している。もとは清水寺の近くの五条坂周辺で製造されていた清水焼だが、公害問題などにより 1965 年以降に製造業者が移転した。近年では清水焼の不振もあり、製造に関わらない住民も団地内に増加している。

新型コロナウイルス感染症の終息が見込めないことから、2021 年度の「清水焼の郷まつり」と呼ばれる催しの中止が決定した。「清水焼の郷まつり」では、清水焼が中心であるが県外からの作家や窯元も出店する。団地の一帯が歩行者天国になり、さまざまな作家や窯元が露店でたくさんの焼き物や掘り出し物を出している。また、普段であれば入りにくい団地内のお店も気軽に買い物しやすい雰囲気になっている。



実際に調べてさらに、「職人のまち京都」を好きになった。深い歴史がある伝統産業を身近に感じる生活環境はほかではなかなか体験できない。また時代と共に人々からより使ってもらえるよう、伝統産業が形を変えていったことも分かった。現在、伝統産業は継承に危機にあるところが多い。私は、大好きな「職人のまち京都」がこの先も継承され続けることを願う。

